

闘奮者若 守る湯銭

廃業続く札幌 業界団体も期待

後継者難などで銭湯の廃業が相次ぐ中、札幌では若い世代が近年、経営を担うなどして、昔ながらの銭湯文化を守ろうと奮闘している。全国的にも若者の間で銭湯人気が高まりつつあり、業界団体が期待を寄せている。(大城道雄)

札幌公衆浴場商業協同組合によると、札幌市内の銭湯は1971年に約270軒あったが、後継者難や内
風呂の普及などを背景に廃業が相次ぎ、5月末時点で44軒と激減している。
65年に創業した同市北区の老舗「奥の湯」(北31西3)の3代目経営者、古名智亮さん(35)は今年1月に経営を引き継いだ。市内の



「奥の湯」ののれんを手に笑顔を見せる3代目店主の古名智亮さん、妻真梨衣さん、長女愛玲ちゃんの3人

高校を卒業後、中国やアメリカに留学し、帰国後は大手家具販売会社などに勤めた。母町子さん(63)から家業の銭湯を引き継ぐよう頼み込まれて約3年前に退職し、手伝っていた。

妻真梨衣さん(32)と長女愛玲ちゃん(8カ月)は時々番台に座り、看板娘として親しまれる。

智亮さんは「昔ながらの銭湯の味わいを残しつつ、もっと若い人に利用しても

らえるよう、変えるべきところは変えていきたい」と意気込む。